

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開2000-120527

(P2000-120527A)

(43) 公開日 平成12年4月25日 (2000.4.25)

(51) Int.Cl.⁷

F 0 3 H 5/00

識別記号

F I

F 0 3 H 5/00

テマコード* (参考)

C

審査請求 未請求 請求項の数 2 書面 (全 3 頁)

(21) 出願番号 特願平10-331835

(22) 出願日 平成10年10月19日 (1998. 10. 19)

(71) 出願人 591266445

市川 雅英

東京都墨田区本所 1 丁目13番11号

(72) 発明者 市川 雅英

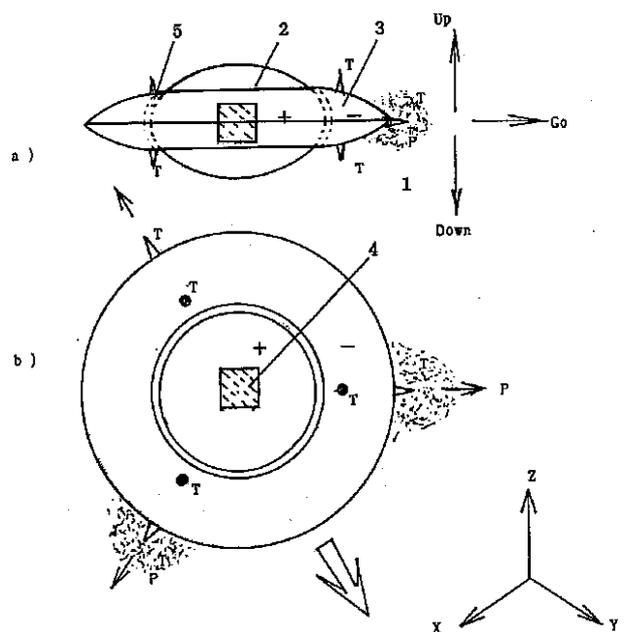
東京都墨田区本所 1 丁目13番11号

(54) 【発明の名称】 飛翔体の宇宙空間における推進方法

(57) 【要約】 (修正有)

【課題】 推力を直流の超高電圧の電界を用いて鋭敏な電極と平坦部電極との相違による電場の発生が周囲の希薄な気体、もしくは大気に影響を与え、希薄気体に荷電粒子を与え、同時に反発力で反動作用が生じ、その反動を推力に利用した飛翔体の推進装置に関する。

【解決手段】 電界の場を作る為、プラス側とマイナス側の電界の場をお互いに絶縁物で距離を離し、放電しにくい状態にし配置する。また推進力の発生する部分には鋭敏な電極の突起物Tもつける。この電極はXYZの方向ベクトルを保つように配置し、電場を切り替えにより進行方向が定め方向制御盤で制御される。周囲にある大気か希薄な気体は荷電粒子に帯電され、帯電を伴ったマイナスの電位を受け取った荷電粒子は反発して離散する。その時の反発作用で飛翔体自身が反対方向に推進作用が発生し移動する。



【特許請求の範囲】

【請求項1】飛翔体を自由自在にXYZの方向に空間移動する事を目的とした推進方法で、推進力として直流の超高電圧の電界を用いた事にある。該本体である飛翔体の外部に鋭敏な電極と平坦部電極との差異部分を設け、電場の発生が周囲の希薄気体に電場が加わりやすい構造とし、発生する荷電粒子の反動力で発生した推進作用を推力の慣性モーメントとして利用した三次元方向の制御移動システムを特徴とした超高電界エネルギーによる推進方法。

【請求項2】該本体である飛翔体の外部に鋭敏な電極数を複数個取り付け、平坦部電極との差異部分を設け、電場の発生を制御可能にするため電気回路スイッチを切り替え、また機械的に鋭敏部電極を出し入れする構造にした特徴の請求項1に記載の超高電界エネルギーによる推進方法。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】本発明は、大気及び宇宙空間における飛翔体の推進力とする宇宙衛星・宇宙パイロット等のXYZ方向に移動を可能とするための装置で、推力を直流の超高電圧の電界を用いて鋭敏な電極と平坦部電極との相違による電場の発生が周囲の希薄な気体、もしくは大気に影響を与え、希薄気体に荷電粒子を与え、同時に反発力で反動作用が生じ、その反動を推力に利用した飛翔体の推進装置に関する。

【0002】

【従来の技術】従来、大気中や宇宙活動において、飛翔体や宇宙衛星の姿勢制御には、軌道修正または宇宙船外での遊泳活動する為のガス推進剤を用いたアポジモーターかジェットエンジンによる推進力等があった。しかし、この推進剤である燃料は、移動本体に一定量しか搭載できない致命傷があった。その為に長期間の推進力活動には限界があった。即ち、燃料切れが本目的の慣性モーメントである推進力発生機の活動力が停止なるからであった。更に構造的に複雑な技術力を要した、しかもアポジモーター方式では移動本体の外側に推進装置を着座しなければ、作用効果も生じない等の欠点が多々あった。

【0003】

【考案の実施の形態】次に、本発明に係わる飛翔体の宇宙空間における推進方法を具現化した推進力装置について図面を参照にし説明する。大気中や宇宙においての推進剤である燃料ガスの補充は地と違い、容易に補充することは困難である。しかるに、本発明の推進力発生機の電気エネルギー源は直流の超高電圧電界を用いるだけであるから、太陽エネルギーを二次電池に充電し再生産するから永続的なエネルギー源である。また、周囲にある希薄な気体分子1が有ればよい。半永久的に動作が可能となるのである。

【0004】構造的にも、縛々あるが参考例として図1と図2に分け説明する。まず最初に図1の如く、電界の場を作る為、プラス+側とマイナス側の電界の場をお互いに5絶縁物で距離を離し、放電しにくい状態にし配置する。また推進力の発生する部分には鋭敏な電極の突起物Tもうける。この電極Tは多数配置しXYZの方向ベクトルを保つように配置する。この電場を切り替えにより、進行方向が定まり4の方向制御盤で制御される。

【0005】その他に、機械的に複雑であるがTの電極を室内に格納する構造でもよい。また、この電気エネルギー源を直流の超高電圧に変換装置によりマイナス電位を、鋭敏な突起物の電極と平坦部電極との組み合わせでなる本体の周囲にマイナス電場が発生する。周囲にある希薄な気体は荷電粒子に帯電され、帯電を伴いマイナスの電位を受け取った粒子Pは反発して離散する。その時、反発作用が生じ、飛翔体自身が反対方向に推進作用が生じ移動する。

【0006】更に、図2の場合は一体構造の円形状である。この特徴は、周囲が丸みの帯びた部分で構成され、鋭敏な突起物の電極Tを切り替え操作制御し、電極に電場が生じた時だけに周囲の大気あるいは希薄な気体の荷電粒子Pに帯電され、もし、本体が円形でなく角張った部分があると、そこに鋭敏な突起物と同等な電極と平坦部電極が出来たことと同じであるので荷電粒子Pが帯電されることになる。即ち、其の部分は推進力と見なされ誤動作の原因ともなる。これら構造概念で設計すれば、形状規模にも制限の無い超大型宇宙船にも可能となる。いわゆるスペース型宇宙船基地も容易である。

【0007】

【発明の効果】以上説明した如く、本発明に係わる飛翔体の宇宙空間における推進方法は、従来、大気中や宇宙活動においても飛翔体や宇宙衛星の姿勢制御には、軌道修正または宇宙船外での遊泳活動する為のガス推進剤を用いたアポジモーターやジェットエンジンによる推進力等による燃料ガスは一切必要としないで、電気エネルギーによる直流の超高電圧だけであるしかも、この推進剤である燃料は宇宙空間に漂うつっている無限にあるフリーエネルギー（無料）の大気あるいは希薄な気体ガスだけである。電気エネルギー源は、太陽電池より取出し2次電池に充電した豊富なエネルギーで最も理想的な装置である。

【図面の簡単な説明】

【図1】飛翔体の側面構造で電界の場を作る為のプラス+側とマイナス側の電界の場をお互いに絶縁物で離し示した図。

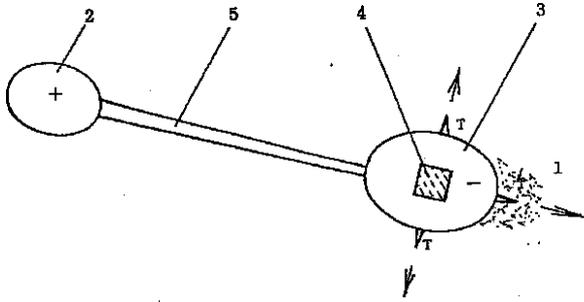
【図2】変型飛翔体の側面構造aと上面図bで、マイナス電界の発生する場を示した図。

【符号の説明】

1；宇宙空間の希薄な気体ガス、もしくは大気

2；+プラス電場 3；-マイナス電場 4；方向制御

【図1】



【図2】

